

1

特別教室群を設定し、そこが山になるように地形を生成

2

delaunay 網を作成し、これを分析対象とする or 簡略化したグラフを作成し、分析対象とする

3

特別教室からの近接性から山の中腹辺りに普通教室群を設定

- ・5,6 年は 6 つ全ての特別教室からの近接性から決定
- ・3,4 年と 1,2 年は決まり方が独立ではないので、それぞれの mini-minimum 値のバランスで決まる

4

学年毎に、特別教室との媒介性を求める

5

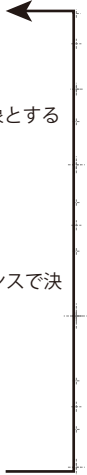
異学年の動線が交錯しているか評価

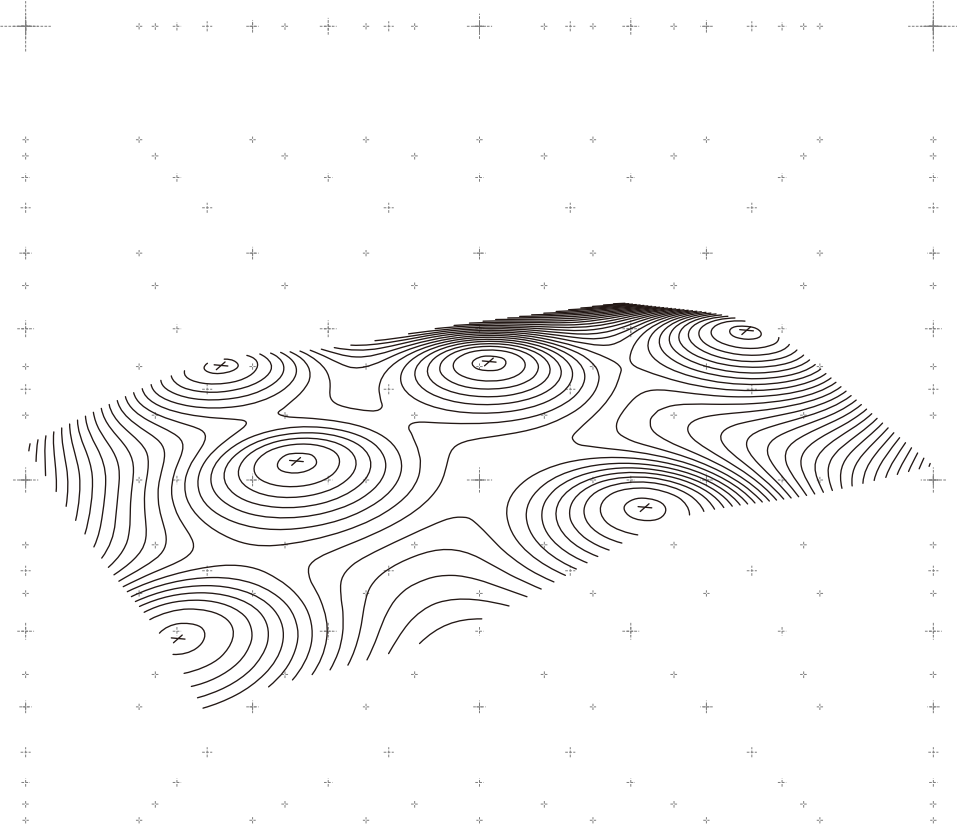
6

管理諸室配置

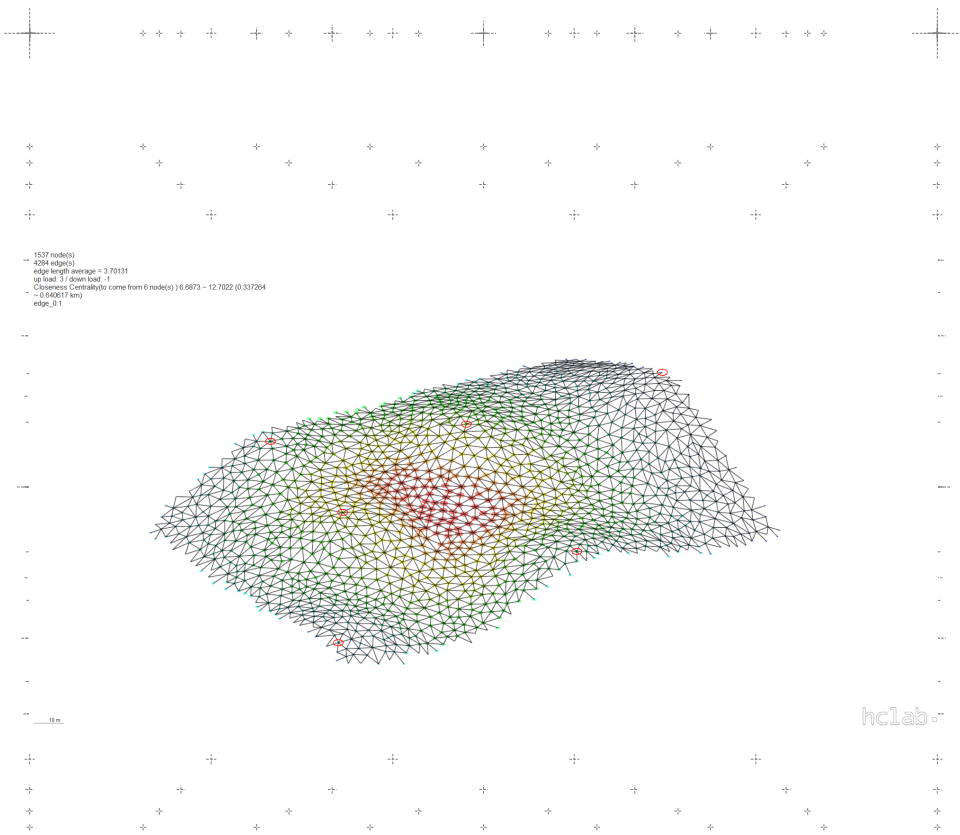
7

(媒介性の低すぎるデッドスペースに幼稚園の教室配置)





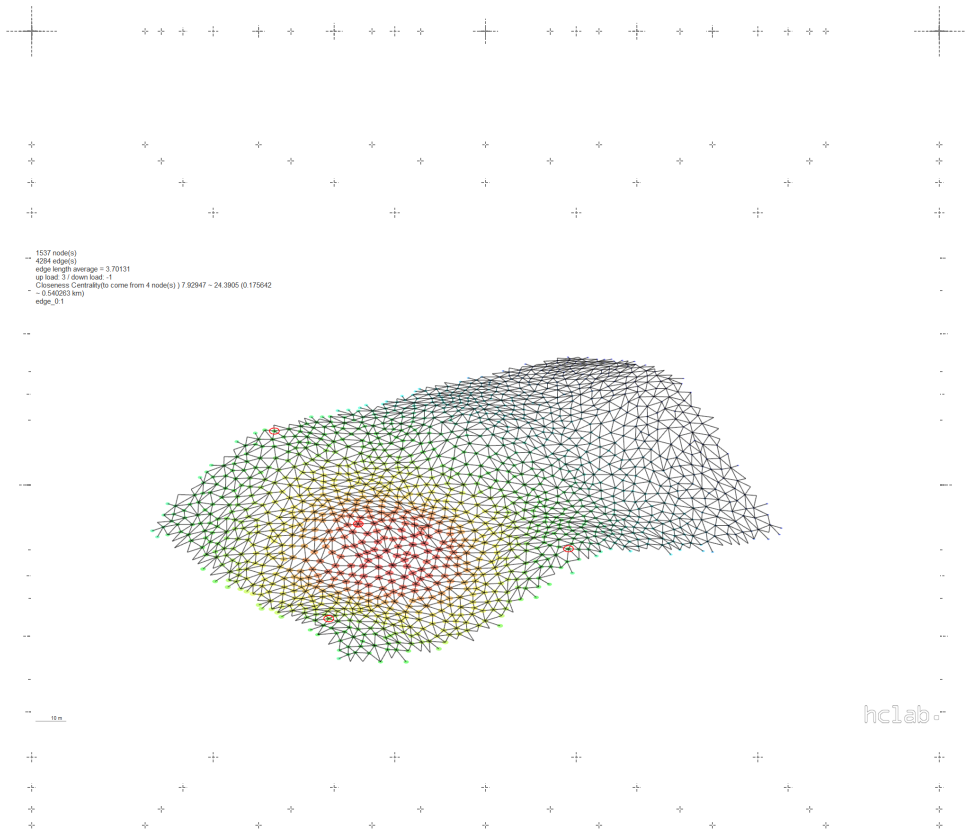
特別教室の設定(互いの距離が10m以上離れる)
地形の生成(傾斜・標高差が極端になりすぎない)



5,6年生の普通教室の決定

5,6年生は6つすべての特別教室を使うので、そこからのminisum値の小さい所に設定する。

その際、普通教室が置かれてよい標高を決めておく。中腹あたり。教室間の距離は10m以上とする。学年毎にある程度まとまりを作る。



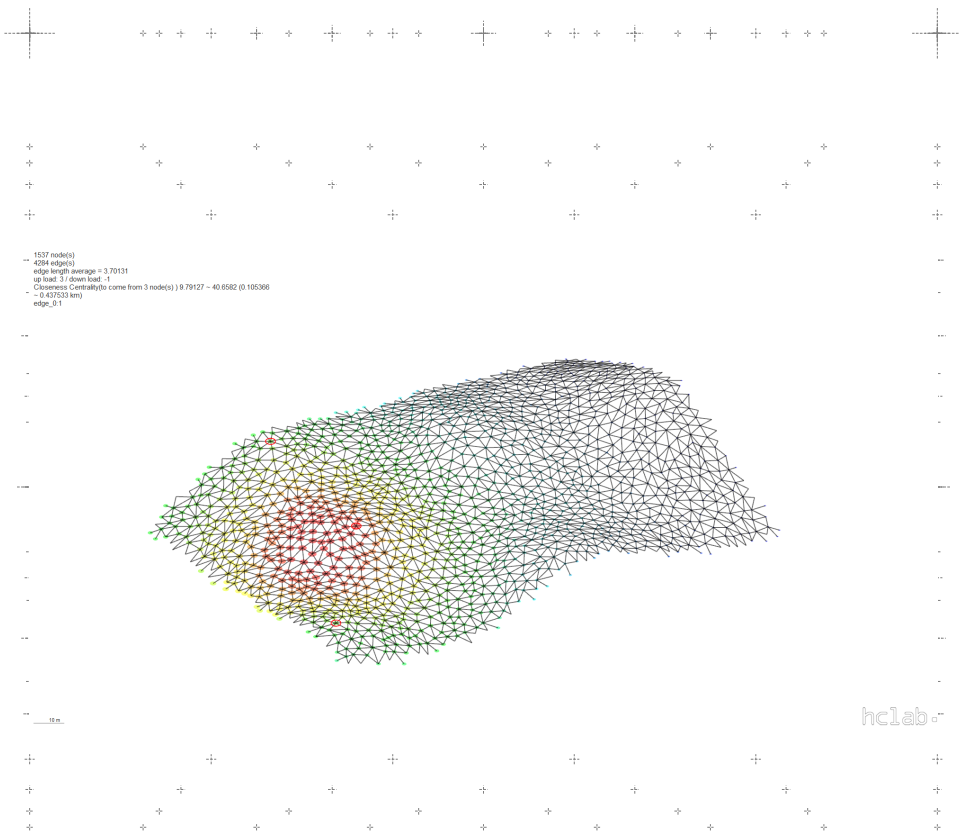
3,4年生の普通教室の決定

3,4年生は4つの特別教室を使う(それを選ぶのに15通り)ので、そこからのminisum値の小さい所に設定する。

その際、普通教室が置かれてよい標高を決めておく。中腹あたり。

教室間の距離は10m以上とする。



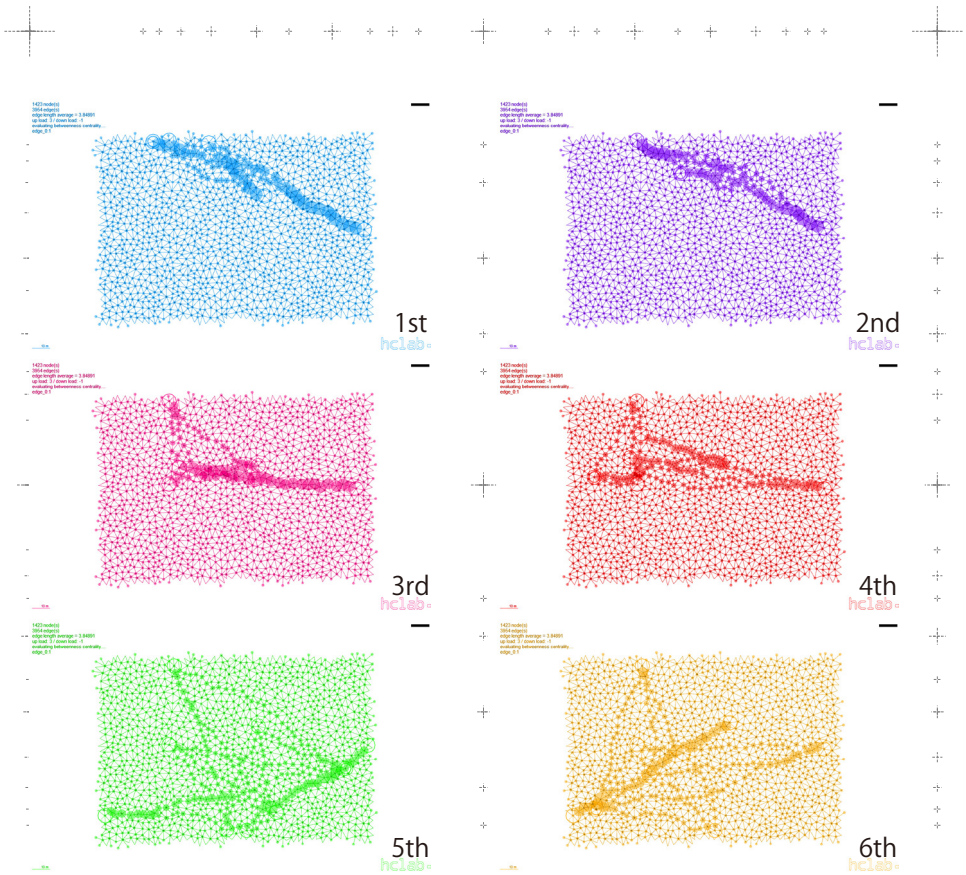


1,2年生の普通教室の決定

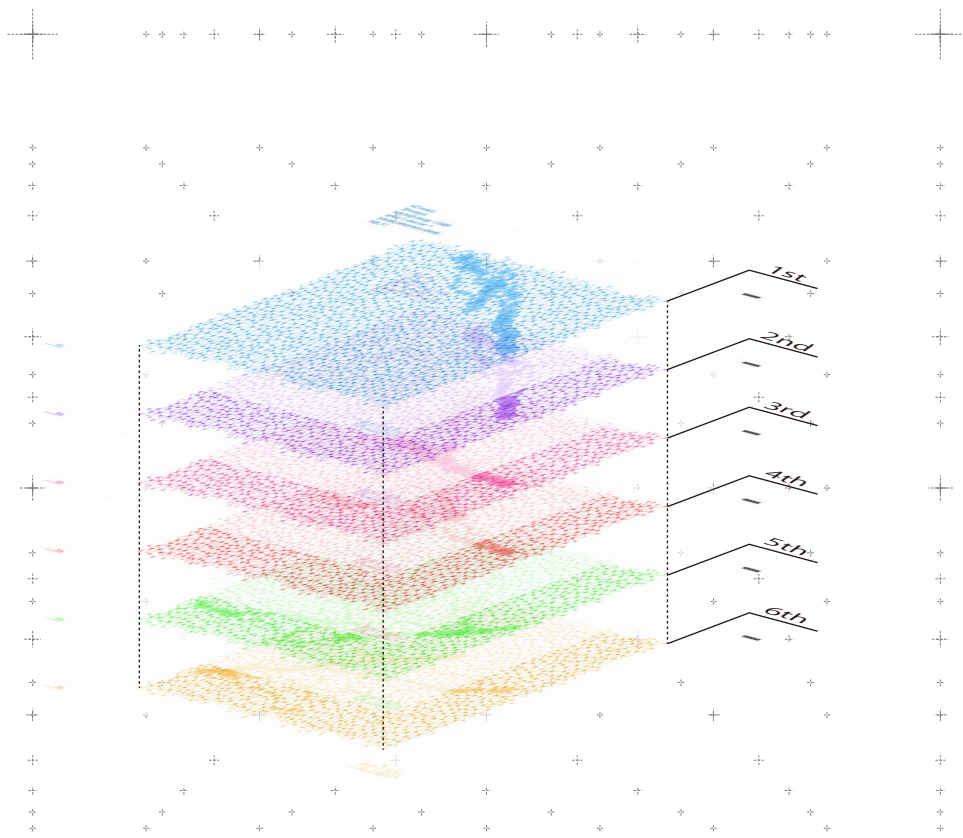
1,2年生は3つの特別教室を使う(それを選ぶのに4通り)ので、そこからのminisum値の小さい所に設定する。

その際、普通教室が置かれてよい標高を決めておく。中腹あたり。

教室間の距離は10m以上とする。



各学年の普通教室から使用する特別教室までのbetweennessを
求める。

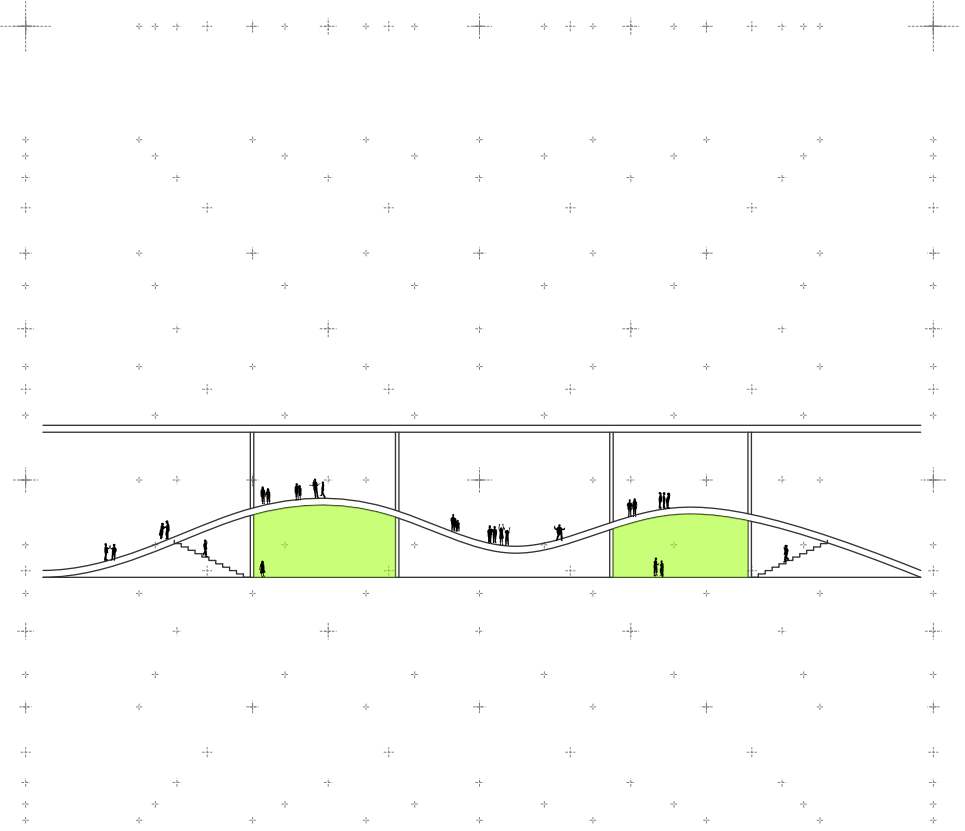


動線交錯の評価。

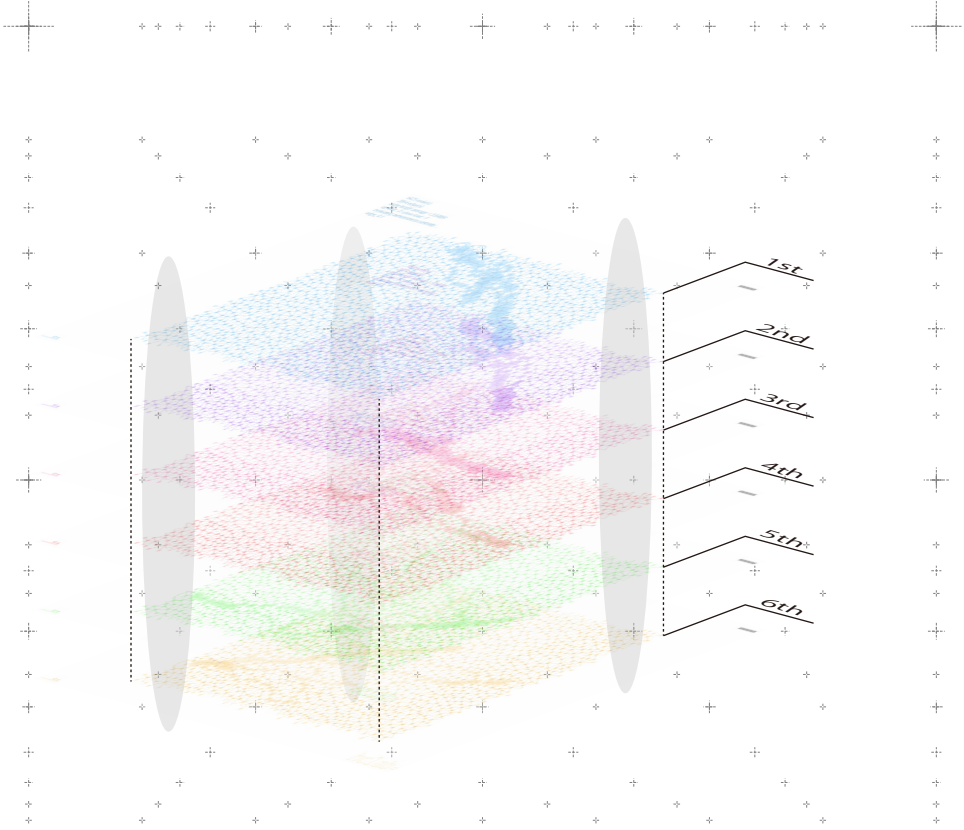
1,2,3,4年生のbetweennessの高いノードが類似。

3,4,5,6年生のbetweennessの高いノードが類似。

1,2年生と5,6年生はbetweennessの高いノードが異なる。



トイレ、保健室、職員室の設定
各普通教室からのminimax値が小さいところに設定。
これらは動線を妨害ないように地形の下に設置。



(媒介性の低すぎるところに、幼稚園の教室を配置。
そこは流動空間のレベルよりも窪んだ地形とし、園児が外に出にくい構造とする。)